

# 水郷のポリティクス

## 河北潟東北岸域における耕地整理事業の導入とその史的背景

Politics of Suigo(Lakeside) : Introduction of Land Consolidation Project in the Northeastern Coastal Area of Lake Kahokugata and Its Historic Background

### 大門 哲

DAIMON Satoru

はじめに

- ①河北潟東北域の生業環境
- ②川尻の資源環境と生業史
- ③蛇行と分岐の地政学
- ④耕地整理事業の展開
- ⑤耕地整理の事業組織
- ⑥耕地整理の史的背景
- ⑦記録された成果
- ⑧記憶された成果

まとめ

#### [論文要旨]

民俗学における稲作特化保障論の近年の関心は、内部資源の多面的利用、いいかえれば家の個別生計状況に集中しているが、いうまでもなく、家を取りまく政治力学を看過することはできない。今回とくに注目したいのは、民俗学で旧来等閑視されてきた耕地整理事業の意義である。

明治以降の耕地整理事業といえば、国家事業として全国画一的に展開され、事業後、劇的に農法が変質したような印象がある。しかし、河北潟東北域に位置する津幡町川尻を対象に、当該事業の導入経緯をみると、そのような印象は根拠がないことがわかる。

まず、空間編成においては、潟縁に位置する地理的環境や、近世期より水運業が稼ぎとして行なわれた関係から、クリークを基軸とする水郷空間への再編が重視された。これによって、農耕用の舟が激増し、河口は舟小屋が並ぶ係留場へと変貌した。つまり、当時の事業は、地域の歴史や環境に適した「現地化」がはかられたわけである。

つぎに、作業内容の変化をみると、水郷空間の造成により、舟運輸送が普及し、収穫後の稲の搬送コストが大幅に軽減されたものの、本田準備作業は、畜耕や蓮華草栽培などの乾田農法を導入するに至らず、藩政期の農法を存続せざるを得なかった。

劇的な作業変化がおきなかったのは、乾田化がされなかったという土壌環境のほか、地主が圧倒的な権威をもち、技術革新に必要な小作層の組織化が停滞したことや、また地主が肥料問屋を営む関係から肥料市場の変化を望まなかったことなど、社会・経済的な要因が複雑に影響を及ぼしたからである。このことは、稲作が地域の政治・経済的な適切性をめぐって結実する社会的実践であったことを物語る。

【キーワード】 水田、水郷、河北潟、耕地整理事業、ポリティクス